

高山の文化を高めた人々

16

音楽と考古学と 寺地茂雄

寺地 亮平



寺地茂雄は昭和六年二月、鋸目立業を営む進三とこまの長男として若達町に生まれた。東小學校六年の担任が吉村比呂詩先生、又斐太中学では大野正雄先生に師事する。両先生との出会いが後の音楽と考古学の原点になった。

中学時代はマンドリン演奏を

愛好する。学業は優秀であったが、病弱だった祖父の強い願いを聞き入れ家業を継ぐ。そのかわりに当時としては高価だったアコーディオンを与えられ、益々音楽の道へと進んで行く。

山下笛郎先生、長尾量平先生らの力で隆盛の極みにあつた高山音楽連盟に所属、楽団ではアコーディオンを、又合唱団ミンストレルコールにも属し、正に音楽三昧の日々。娯楽のなかった時代に高いレベルの音楽を目指し市民にも支持された活動は、復興のエネルギーになったばかりでなく、地方都市の文化活動の原動力となった。

その後音楽連盟を脱退、水曜クラブ(合唱)を主宰、昭和三十年代に入ると世相も安定し新たな活動を目指すグループもふえた。そんな中、当時個々に合唱活動をしていた団体が、発展的解消のもと大同団結しようとする機運が生まれた。父と生涯の盟友松村博氏との出会いである。代表者の協議により昭和三十四年七月「高山市民合唱団」は誕生した。初代団長山下笛郎先生を支え、毎年の定期公演を始め、成人式・

カーニバル等公式行事への参加、大学合唱部や交響楽団の高山公演への賛助出演など枚挙にいとまがない程の活動を推進し合唱を通じた芸術の追求と郷土文化の高揚に邁進する。また市民合唱団十周年には、城山如意ヶ丘に「飛騨山娘歌碑」を建立、他合唱団体との交流・音楽技術の向上を目的に全飛合唱祭を立ち上げる。音楽後継者の育成をと高山少年少女合唱団の発団にも大いに関わった。

考古学の分野では昭和二十五年、笠原烏丸氏の飛騨考古学会に参加、三十八年丹生川村根方岩陰遺跡発掘調査員として従事、四十八年には、地元の研究者を集め、高山考古学研究会を創立、初代会長に就任。五十一年の江名子のツルネ遺跡発掘調査を民間ボランティアで主宰し岐阜県第一号の方形周溝墓が発見される。又五十四年には飛騨史学会創立に奔走し第一回大会を開催する。この分野でも、個人や小サークルを束ね、新たな組織作りや大会運営の牽引役として活躍した。その流れは後に石原哲彌氏を中心に飛騨考古学会とし

て発展、藤本・野村・吉朝各氏に受け継がれ現在に至る。

飛騨に立派な音楽堂が欲しいという父の願いは「高山市民文化会館」の完成により叶った。

その柿落しはぜひ第九でと、松村・前越静二両氏らと奔走、昭和五十七年十一月、大町陽一郎指揮の東京フィルと飛騨で初めての第九合唱の公演を成功させる。父の人生の中でも至福の時であった。

昭和五十六年からは教育委員に任ぜられ、五十八年教育委員長を務める。

非凡なリーダーシップと一途なチャレンジ精神は今の時代にあっても必要とされたであろう。時として過激でもあったが人情に厚く常に良き師・友人に囲まれていた。音楽と考古学を愛し高山の文化の高揚を願いつつ、五十三年の短くも濃い生涯を駆けぬけて逝ったのは昭和五十九年十一月十九日のことであった。

(この原稿を書くにあたっては、森本嘉文先生、前越静二氏、藤本健三氏に多大なご協力をいただきました。)